

New Face

春日 敏測 (自然科学研究機構国立天文台 RISE 推進室)

Congratulation.

1通のメールが届いた。渡部潤一氏からだった。2002年の、蒸し暑さがまだ残る9月。なんと、総研大に合格したのだ。博士課程への進学を許されたのである。とても信じられない。つい数時間前、三鷹市にある国立天文台で入学試験を受けてきていた。

修士論文の中間報告?今後の研究予定?質問?手応え?

試験の内容をまったく思い出せない。緊張のあまり、口は渇きでカラカラ、瞳孔は開きっ放し、呼吸は...どうだっけ。頭がまっしろである。でも、複数の先生方が鬼神のごとく怒り狂っていたなあ、惨々な内容であったことだけは覚えていた。

試験会場からアパートへの帰り道。いったい、いくつの不安が頭をよぎったろうか。

"後悔は少なめのMylife..." (B'z,1991年)。

"明日の今ごろには、私はきっと泣いてる..." (宇多田ヒカル, 1999年)。

懐かしい歌謡曲が脳裏をかすめる。こんな、奈落の底まで落ち込むべき時にJ-popだ。ああ、カラオケで歌いたい。いやいや、もっと真面目に落ち込まないと。研究と人生についてなのだ。こんな時、太宰治なら「もう死のうと思った。」と考えるのだろうか?でも、村上龍の方が好きなんだよね。死んでたまるか。試験後も



不安はあまりなかったのかもしれない。

とはいえ、試験結果はギリギリだったようだ。なんと、総研大創立以来、初めて投票にまでもつれたらしい。私の合否をめぐる、意見の対立は苛烈を極めたようだ。春日は絶対にダメだ、という否定派と、アイツはきっと化けるぞ、奇跡を起こすはずだ、という賛成派。いつまでも議論が続いたが、結論が出ないため、投票にまで及んだとのこと。その結果、わずか1票差で合格が決定したのだ。

その時、渡部氏は、私の指導教官候補だったため、投票には参加させてもらえなかった。また、公平のため、投票部屋から追い出されていた。胃がキリキリと痛く、ハラハラドキドキ。非常に気が重かったそうである。さすがの彼も、このような経験は初めて。心身ともに、かなり参ったらしい。私は、友達の家でビールを飲みながら、新たな生活を楽しみにしていた。

2003年4月、国立天文台での博士課程が始まった。私は理論部への所属が決定した。これが、大きな刺激となった。同年代の多くの学生たちが、すでに複数の

査読論文をpassしているのだ。しかも、彼らは研究活動に加え、酒飲みやカラオケもハイレベルだった。驚くことに、明け方まで飲んで歌っても、定時には研究室に顔を出し、涼しい顔で研究を続けるのである。論文をsubmitしたから、reviseをしたから、論文がacceptされたから、時には、ただ暑いから、というように多くの学生が理由をつけて、飲むキッカケを毎日のように作るのだ。そのおかげで、私のモチベーションは凄まじく高まった。人間の欲望に沿ったactivityにより、ゼミでは、毎週のように発表を担当できるようになった。

ゼミは、月曜日の13:30から行われる。参加者には、天文台外の所属も多かった。当初は、怪しいひとたちが来てるなあ、という印象であった。むこうも、そう思っていたことは後に聞かされた。渡部研究室において、怪しさと実力には著しい相関がある。いつもゼミ部屋の前方にどっしりと座り、腕組みをしながら、ビシビシとコメントをぶつけてくれたのが、河北秀世氏だ。当時は、その実力と威厳から、とても目上の先生に見えた。毎週、私が流星のスペクトル解析を発表するたび、緊張感を持ての確なアドバイスを数多くしてくれた。実際にスペクトル解析をした経験があるからこそ、可能なコメントが多かった。その合間を縫って

「あっはっはっ」

と渡部氏の高笑いが入る。ゼミでは笑いをとることも重要だ。私の観測的流星研究が、着実にステップを踏んでこれたのは、厳しさの中に笑いのスパイスが効いたゼミのおかげだろう。

時には、観測という枠組を越えたゼミも有益だ。博士論文提出後は、北大・低温研にて、山本哲生氏や木村宏氏との理論的研究に花を咲かせた。山本氏は、名古屋大学修士課程時代の恩師である。院試の際、私は

3日間ほど大学へ泊めてもらい、とても珍しがられたのを覚えている。修士論文提出後は、早朝から深夜まで約2ヶ月間にわたり、スペクトルの基礎理論についての議論に付き合ってくれた。私が天文台へ異動した後も、ずっと後押ししてくれた。研究においては熱く厳しい目をもっており、北大での議論では緻密な論理展開をたたきこんでくれた。その反面、飲み会では全く別の顔を魅せる。山本氏とは研究でもprivateでも、世代差を感じることなく仲良々できる。現在の私があるのは、もしかすると、飲み会での彼からの影響を強く受けたからかもしれない。

思い返せば、博士課程時代では、なりふりかまわず自分の道を進むことができた。自己責任というリスクを負った研究生生活。多くの指導者に恵まれ、励まされ、私は飛躍的成長を遂げることができた。時には、激しい衝突もあり、彼らの精神に強烈なダメージを与えてしまったこともあった。しかし、流星科学の発展には、必要な要素であったと思う。

充実感のともなった研究生生活では、今、自分にできることが最優先される。圧倒的なポジティブ思考から、未来への具体的なイメージを描くことができ、新たな一步を踏み出すことができる。その一步は、新しい変化をもたらし、従来の自分との違いを学ぶことができる。成長することによって、専門とする流星科学を客観視でき、異分野との交流において、その存在を力強く証明することが可能だと信じている。

視野を広げることの重要性、それがもたらす成長性を意識し、今後も研究成果を出し続けて行きたい。